

# 山村社会の家庭変動 第1報

高知県吾川郡池川町竹ノ谷部落の家庭生活に  
関する家政学的研究の試み

Family Change in a Rural Community Located near Mountains. I  
Home Economic Approach to the Family life of a Hamlet,  
Takenotani, in Kochi Prefecture

笹原 邦彦

Kunihiko SASAHARA

(昭和42年1月11日受理)

- |              |             |
|--------------|-------------|
| まえがき         | (4) 夫婦同行型家庭 |
| 調査の手続き       | (5) 企業型家庭   |
| 竹ノ谷部落の一般的傾向  | (6) 月給取型家庭  |
| (1) 伝統的農業型家庭 | (7) 生活保護型家庭 |
| (2) 出稼ぎ型家庭   | あとがき        |
| (3) 日雇い型家庭   |             |

## まえがき

さらにもう一つの subtitle をつけることが許されるなら、——家政学科2年生の総合コース「家政学実習Ⅱ」で行なった教官学生共同の調査に関する報告書——という言葉をつけ加えたいところである。

われわれの家政学科は、昭和39年度に新設されたものである。というよりは、それまでにあった入学定員60名の生活科学科を、入学定員それぞれ20名の、家政学科、食物栄養学科、生活理学科の三学科に分けたというべきである。ところが、この家政学科は、他の2学科に比べて、どうも、個性がはっきりしない。田中久子教授によれば、アメリカにおいても、「一般家政学」のコースは、「家政学部の中で最も特色のはっきりしない、学問的に安易な科である<sup>(1)</sup>」という。われわれの家政学科も、その悩みによるめきながら出発した。

そこでまず、われわれの答えなければならない問は、「家政学とは何か」ということであった。もちろんこの問題は、この時突然、われわれの前にあらわれたのではない。既に、昭和24年に家政学部生活科学科が出発した時から、解決しなければならない課題として、教官の間で論議が繰り返されて来た。そして、家政学あるいは生活科学が、人文、社会、自然の各系列に属する諸科学の総合の上に成立するという結論を導き出すのに、大した時間は必要でなかった。応用科学、実践科学、技術学という言葉も出て来た。没価値的な面も価値的な面も、ともに含まなければならないことも、認められた。Sein (存在) の学であると同時に Sollen (当為) の学でもあるという表現も用いられた。そして、「生活動

物」「生活植物」「生活物理」といった学科目を開設し、動物学者も植物学者もすべて家政学者になることができるという形にさえなってしまった。むづかしい概念をいろいろといじくりまわったあげく、野口サキ教授が「私の科学としての家政学、すなわち学問としての家政学は、諸科学の家族に関する研究分野の総括名称である、すなわち、自然科学や社会科学や人文科学のそれらもろもろの科学の中に、家族に関する研究分野がありますが、それら家族に関する研究分野を集めたものにつけた代表的な名称である。と、このように考えております<sup>(2)</sup>」と、明快に定義しておられるが、われわれの家政学も、正にこの柱をぐるぐるまわっていたに過ぎないことに気付かざるを得なかった。

もちろん、こうした家政学の学問論も、これだけで誤りだとは、われわれも考えない。犯罪学などという学問は、犯罪心理学、犯罪医学、犯罪社会学といった学問の総称以上のなにものでもないように見える。家政学が同様の形をとったからといって、その学問として価値を失うとは考えられないのである。それどころか、この形で行きさえすれば、漬物の化学変化の研究も、ネズミの生態学的研究も、クモの分類学的研究も、すべて家政学になり得るのであるから、手数のかかる理屈を考える必要もなく、家庭に直接間接に関係のあるものの中から、個人の好みにあったものを選び出せばいいことになる。まことに結構な発想といわなければならない。

しかし、犯罪学なら、世の大学に犯罪学科という学科がないから、それですむかも知れないが、家政学が家政学科教育の中核を占めるということになると、そうは間屋が卸さない。メリケン粉とパン粉と油と豚肉を食べさせておけば、学生の腹の中でトンカツができて上るだろうと、ノホホンとかまえるわけにはゆかない。なんとかして、どこかへ統一しなければと、家政学科のカリキュラムの中に、総合コース「家政学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」と、それぞれの実習とを必修科目として置き、家政学科所属の12名の教官が、学生たちと discussion をしたり、共同で家庭生活実態の調査を行ったりして来た。つまり、この実践の中で、家政学の諸分科の統一を、成し遂げようと考えたわけである。

こうして3年が経過した。第一回の入学生が、既に最終学年に足を踏み入れようとしている。にもかかわらず、彼女たちは、「家政学とは何か」「私たちの専門はなんであろうか」という問を、われわれに投げかけて来る。一応わかったつもりで進んで来た教師たちも、ここでハタと立ち止まらざるを得なかった。「われわれの家政学の捉えかたが、まちがっていたのではなからうか」この疑問が、3年経った今、更めて大きな問題としてわれわれの前に立ちふさがるのが覚えたのである。

われわれは確かに、家政学の統一を求めていた。しかしそれは、「学生の心の中に」であって、「教官の研究の中に」ではなかった。教官は依然として、自らの城を守り続けていた。家政学の discussion の場でも、教師たちは謙虚に、自分の専門分野において語り、その外へは一步も出ようとしなかった。その結果、総合コース「家政学」そのものが、諸科学の静的 *statisch* な並列に終り、そこに動的 *dynamisch* な統一が生長する可能性を失い、従ってそれは、もはや、実践ではなくなっていたのではないか、という反省がわれわれの中に起った。

ここでわれわれが想い出したのは、J. M. Cattell の言葉である。彼が心理学の定義を問われた時、“Psychology is what psychologists do.” と答えたという。この姿勢がわれわれの間に、欠けていたのではなからうか。考えてみると、家政学の系譜は、女学→家

事→家政の方向に生長して来たものが、家政学に変わろうとしていると捉えるべきであると思う。家政学が、農芸化学や経済学や、社会学や心理学の子孫であってはならない。もっと端的にものを言えば、農芸化学者や経済学者や社会学者や心理学者が、そのまま家政学の本家になれるものではない。家政学の本家は、あくまでも、従来裁縫や調理や育児や作法を教えて来たかたがた、そしてそれを継ぐかたがたでなければならない。統一のこの場所に対する認識の不充分さが、家政学の性格をあいまいにさせた第一の原因であると、われわれは考えた。

しかし、だからといって、そのかたがたが現状にあぐらをかくことではない。むしろ、それを絶えず否定し続けるところに発展がある。発展 *Werden* するということは、*Sterben und Werden* (死して成る) といわれるように、現状に不満をもち、それを変更しようとする働きを必要とする。例えば、調理を専門にする者が栄養学や食品学の視野で反省することはもちろん、久保喜男氏がその「食事計画論」<sup>(3)</sup> の中で、こくめいに論じておられるように、更に、研究の領域を広げて行かなければならない。現状の否定が、「幸福な家庭づくり」を志向することによって、家政学の *dynamisch* な統一を、はじめて可能ならしめるのだと、われわれは考えた。

しかし、こうした発展には、数多くの学問の支えを得なければならない。ところが、先進諸科学の家庭に関する研究が、あまりにも多過ぎる。そこで、家政学者の一部は自信を失って、他の科学に嫁入りをしその科学によって、学者としての自己防衛を完うしているように見える。しかしこの結婚のあるべき姿は(乱暴な表現であるが)ムコ養子型でなければならない。こちらは家付きの娘である。ムコ養子をもって、気に入るだけコキ使つてやろうという姿勢をとる必要がある。

ところが、このムコ養子をコキ使う能力が当方にあるかどうかの不安が、ブレーキをかける。そこで、われわれは蛮勇を振るって、次のような結論を下した。つまり、家政学のような貧しい家にムコ養子に来る科学は、コヌカ3合も持っていないお粗末な連中である。つまり上等のムコをもらおうと思うな。家政学者のこなし得る科学だけでもらえばいい。分不相応に立派な科学を使おうとする必要はない。ここ当分の間は、*dilettantism* でいい。むしろ *dilettantism*こそ、現在の家政学を統一ある全体にし、実践科学たらしめる推進力ではなからうかと、われわれは考えた。

「家庭は、昔は与えられたが、今は作らなければならない」という言葉がある。しかしわれわれは、家庭を「作るもの」と考えることに危険を感じずる。というのは、「作るもの」という言葉で、思弁的 *spekulativ* に導き出された *Sollen* が、家庭の主体性を圧倒しがちであるからである。家庭は個性と主体性をもって、それ自身の力で *Werden* するものである。われわれにできることは、その援助だけに過ぎない。

同じことが、家政学についてもいえる。家政学は「作るもの」ではなく、「育てるもの」である。われわれはこれまで「家政学のあるべき姿」を問題にし過ぎた。そのために、家政学の対象が前面に出て、家政学の発達が分化 *differenciation* の方向に向ったように見える。これを、子どもの発達になぞらえるなら、学童期の段階にあったともいえる。

われわれは、この家政学を青年期の段階に *werden* させなければならない。つまり統一 *integration* の方向に、進路を変更させなければならない。従って、対象的側面よりは作用的側面にひずんで、進行すべきだと考えた次第である。

そこでわれわれは、J. W. von Gothe とともに、「はじめ行為ありき」とばかりに、この方向に進むことにしている。そして、ここに報告するものは、その「試み」の一例である。

### 調査の手続き

この調査は、昭和41年9月から12月までの間に、高知県吾川郡池川町竹ノ谷部落70世帯に対し、質問紙を配り回答してもらったものと、その中から27世帯を選び、教官5名と家政学科2年生21名が訪問して、聴取りを行なったものである。

質問紙は、主婦に回答してもらった。主婦の役割を取っているかたが2人ある場合は、若いかたにお願いをした。そして、回答を得た数が61であった。

竹ノ谷部落は、池川町の中心である商店街から、歩いて20分ぐらいの距離にある。池川町には、医院1、診療所3、医師2、歯科2、薬局3、理美容院10、浴場2あり、これがこの地区に集中している。大正2年3月に町制を実施しているので、高知県の町としてはシニセのうちに入る。しかし、高知一松山間の国道33号線からは、はずれている。そして、その国鉄バス大崎駅との間に、バス便が一日8往復しかない。このことが池川町土居の商店の繁栄の原因になっているのかも知れないし、またこのことが、池川町の自足を示す指標であるともいえるかも知れない。またそればかりでなく、この土居には8軒の飲食店があって、酒も飲ませている。ここへは、国道33号線の沿線にあり、急行バスならば、1時間半から2時間の間で高知に行ける距離にある吾川村や仁淀村から飲みに来る客が多いという。旅館も2つあり、そのうちの一つは、大きな旅館である。タクシーも6台ある。土居の世帯数は、昭和41年11月末現在で、359、人口は1,189である（住民登録）。そしてその半数以上が商家であるから、かなりの消費地区を形成している。自動車の修理店も2軒あり、おおかたの専門店が揃っている。

こうした消費地の隣接部落でもあるのだから、竹ノ谷部落には、都市の近郊農村といった性格もあるに違いないと、考えた。しかし、竹ノ谷の人口は、昭和36年5月に335であったものが、5年間に284に減っている。15%の減少である。高知県全体の減少率が4.5%であるから、この数は、かなりはっきりした山村の離村傾向を現わしているものと見ることができる。もっとも池川町全体が19.5%減っており、部落によっては35%近くも減少しているものが、いくつかある。その意味では中途半端の地区でもある。

しかし、農業構造改善への取り組みは弱い。それでも、これが成功し、企業としての農業がある程度確立し、安定している家も数軒ある。全日制高校への進学率は、町全体の平均より、かなり低い。昭和40年度の中卒者で全日制高校への進学者は一人だけ。あとは全員、県外の会社に就職している。（なお、池川中学校の40年度の卒業生79名のうち、全日制高校への進学者は18人、家に残った者は、女子2人だけ）

生活保護を受けている世帯が5、これは率が高い。結核の患者は在宅治療5人、観察中3人、この数は、池川町全体の部落の中で、最高の比率を示している。以上のような資料から、この部落には、いろいろの類型の家庭があって、山村家庭の変動を見るのに、最も好都合な対象のように思われたので、この部落を選ぶことに決定したわけである。

## &lt;調査のねらい&gt;

(1) 類型的に捉える。家政学は、窮極において個に結び付かなければならない。それを考えて、個と一般の中間にあり、仲介の役を果すと思われる類型を求めようとしたわけである。

(2) 変貌の過程を見る。家庭はそれぞれ自分の歴史をもっている。そして、現在の山村の家庭は、激しく変化している。その変化に対処して、より幸福な家庭づくりの方向にそれを推し進める課題を家政学が負っているからには、過去から現在への変遷の過程を知り、その未来を予測するという研究が必要である。

(3) 衣・食・住・経済・労働・人間関係などを、それぞれ独立した機能として捉えず、相互に有機的な関連をもち、一つの構造ある全体として発展しつつある家庭を作りあげているものとして見て行く。いいかえると、一つ一つ家庭を生命をもった統一体として、ていねいに見て行くことを、この調査の眼目にする。

## 竹ノ谷部落の一般的傾向

<家族構成> 昭和40年国勢調査によれば、高知県の一世帯当り構成員は3.65で、池川町のそれは3.62である。高知県の人口集中地区は3.19で、高知市の人口集中地区は3.11である。この値の低さが都市化の指標の一つであることは、まちがいない。

昭和40年版の法務省民事局編「住民登録にもとづく全国人口・世帯数表」によれば、その最も少いのは東京都の3.038、2位は神奈川県3.373、3位大阪府3.619、4位高知県3.759、5位京都府3.761、その後、広島、兵庫と続いている。池川町の昭和41年11月末の住民登録によるとそれは3.65である。こう見てくると、高知県や池川町のこの数字が都市化によるものとは考えられない。

さて、これで池川町内の各部落の状態を見ると、商店街では3.4であるのに、更に奥に入ると、坪井川3.1、竹ノ谷東3.1、入江谷3.2、明戸岩3.3、岩柄3.4というような構成員になっている。これは明らかに若い者を中心とする離村によるものである。そしてこの数も、国勢調査の数字を用いれば、3の代を割ることはまちがいない。住民登録はそのままになっているが、既に都会の子どものところに行ってしまう老人、出稼ぎに出てほとんど帰らない独身の青年などが、相当数あるはずであるから。

竹ノ谷部落も、住民登録によれば、この数は4.1であるが、9月末現在の居住者について計算すると、3.5という数になる。

一世帯当り構成員数が、高知県が全国の大都市なみに低いこと、池川町の部落に高知市以下の数を示しているものがあることは、都市化ではなくて、むしろ、辺地化を示すものと考えなければならない。なお、竹ノ谷部落の上記居住者について老年化指数を計算すると44.3になり、特に壮年人口の不在が著しい。

<人口移動> 昭和40年11月から昭和41年10月までの人口移動を住民登録によってみると、県外への転出は233、転入は107、県内への転出は177、県内からの転入105、合計622で、この数は町人口の約11%に当る。このうち女子は308でおよそ半分。山村の人口移動は男子が圧倒的に多いというのが常識になっているが、この比率が1:1になっていることは、男子の移動が住民登録を離れて行なわれている証拠になると思う。この数を加える

と恐らく20%を越すものと思われる。僅か1年間にこれほどの移動が行なわれているので、この山村は、もはや、閉ざされた社会ではないといえる。

また聴取りによる27世帯の回答から推定すると、その家族の兄弟姉妹のうちで25才から35才の間の者の3割は県外に居住し、3割は、いわゆる「サラリーマン」(但しホワイカラ一だけではない)になっている。

＜子どもの結婚に対する態度＞ 子どもの配偶者に対する親の希望は、「本人まかせ」と答えた者が71%、「県外人でも近くに住むならよい」という答えを加えると、男の子については84%、女の子については80%になる。8割以上の親が、自分の子どもが県外人と結婚してもいいと考えているわけである。この点、高知市周辺の平場農業地帯で、60%以上が「県内人でない」と困る」と答えていたのと、対照的である。(家政学科1年生の調査による)

＜その他の意識＞ 「あなたは、結婚の年まわり、家の方角、旅立ちの日の吉凶などが気になりますか」という問に対して「非常に気になる」と答えた者が16%、「ほとんど気にならない」と答えた者が46%、「国の政治は偉い人が考えてやってくれるから、まかせておいたらよい」という態度を示した者が23%、「子どもの一人と同居するか」という問に対して、「同居する」と答えた者が34%となっている。男の子に「農業をさせたい」という者が9%、女の子を「農家の嫁にやりたい」が僅かに4%、となっている。しかし、老後誰の世話になるかという問に対しては、「長男」と答えた者が80%、男の子のない者で「長女」と答えた者が11%、結局、合計91%が長子をあげている。伝統的な態度を強く見せているのは、この事項だけである。

＜親族関係＞ 成人してから後の、親族間の特別の親密さは、ごく少数の例外を除いて、兄弟姉妹の範囲に縮小しているようである。そしてその兄弟も、両親の死後は、遠方に住んだり、あるいは近隣に住んでいてもその配偶者との関係がうまく行かないと、疎遠になって行くようである。古い本家分家の関係は、実質的には殆んどなくなっている。これは明らかに、古い、制度としての家の崩壊を示し、親族関係も近代的な、極めてpersonalなものに変貌してしまったと思われる。

＜家計費＞ 5人家族で月額4万円前後が標準のように見える。この額は昭和40年度「国民生活白書」<sup>(4)</sup>に示されている都市勤労者世帯の51,859円、農家の50,682円、に比べて少なくはあるが、その格差は著しく減少しているように思われる。そして「家計費はギリギリにつめているので、少しもぜいたくになっているところはない」と答えた者が59%あるが、聴取り調査からの推定では、「現金に困る」家庭は、1割前後のように思われる。食生活も動物性蛋白質が著しく不足しているかも知れないと疑問の残る家庭は、15%以下である。衣生活もよほどの老人か子どもでない限り、男はセビロを着着、女はよそ行きの和服と洋服をもっている。テレビの普及率85%、電気洗濯機のそれが74%である。この部落での最近の分娩も殆んど全部が、病院である。医師や歯科医の治療を、この一年間に一回以上受けた者が少くとも80%。(池川町土居でそれを受けている。耐久消費財の購入も、殆んど全部この土居であるから、これを中心とする医療圏、購買圏は、極めて明確な形のものである。)国保加入者270、つまり特別の者以外は全員加入となっている。70才以上の老人と中学生以下の子どもを除くと、殆んどすべての女子が理美容院に行っている。

こう見て来ると、この山村の部落の家庭生活が、予想外に都市化していることに気がつ

く、しかし、その都市化の進行が、ピッコを引く形で進んでいるようにも見える。マットレスの普及率は60%以上あるのに、電気掃除機は5%にも至っていない。扇風機もごく最近入りはじめて、まだ30%程度にしかっていない。生産性の低い生産労働も家事労働も遠慮なく切り捨てて、もうミソやショウユを作る家はほとんどなくなっているのに、その労働を客観的に測る気風はまだ育っていない。農業簿記をつけている家は、6%しかないし、現金の出納だけでも記録しているものも30%しかない。部落では撞精組合というものを作って、米をついたり製粉をしたりする機械を共同で使用しているが、役員はあるが、成文化された規則はない。伝統的な親類付き合いはなくなってしまっているが、班別組織で古い「ゆい」という互助的な制度も残っている。本家分家のつながりはなくなっても、夫や妻の兄弟と強いつながりが部落中にある。夫の兄弟も妻の兄弟もこの部落にいないという家庭は、10世帯。つまり14%しかない。近隣関係が近代的なものに変わりが、古い形もまた温存される可能性が残っている。

こういう複雑な形で社会が進んで行く場合、いろいろの類型の家庭が、浮き彫りにされることがある。そこで、その類型をさがして見た。最初は Ed. Spranger の *Lebensformen* 的に、家庭の目標を中心にして、条件を分析してみたが、どうもはっきり出て来ない。ひょっとしたら、この社会の社会的性格が、D. Riesman<sup>(5)</sup> の、伝統志向型から外部志向型に、いきなり飛躍してしまって、内部志向型の段階を経ていないからかも知れない。というのは、家庭が明瞭な目標を持ち、それを意識化し、変動する社会に合わせて家庭生活のさまざまな領域に浸透させることは、内部志向的な性格なしでは、極めて困難なことのようと思われる。小倉武氏は、農業の自立経営を可能にするためには、「内部志向型の社会的性格が形成されるような家族経営がなくてはならない」<sup>(6)</sup> と言っているが、現在の段階では、その気配は少ない。

そこで改めて、家庭をかこむ外面的条件を中心にさがして見ると、はっきりした形が見えた。それが次に挙げる7つの類型である。(1) 伝統的農業型家庭。(2) 出稼ぎ型家庭。(3) 日雇い型家庭。(4) 夫婦同行型家庭。(5) 企業型家庭。(6) 月給取型家庭。(7) 生活保護型家庭。

#### (1) 伝統的農業型家庭

拡大家族で構成員数は多い。現金収入は麦と甘藷が主。従って現金支出を最少限に止めようと努力する。日常的な支出は、5人家族で2万円以下が普通になっている。特に食生活は、なるべく自家製で間に合わせる。しかし、衣類や耐久消費財は、分相応に整えなければならない。テレビも、3年前からこの型の家庭にも入りはじめ、昨年、全部に行きわたった。電気洗濯機、自動二輪か原付、のない家はない。耕耘機も三軒に一軒ぐらいある。男はセビロを2〜4着持ち、女は外出着の和服と洋服の両方をもっている。

夫婦とも余暇はほとんどない。しかし生活のテンポはおそく、後に述べる夫婦日傭型のように忙がしくはない。小学生の子どもがある場合は、母親が一学期に1回か2回は、参観日に出席する。しかし子どもを出世させてやろうというファイトもないので、担任の先生とは、「道であえば挨拶する」程度以上の接触はない。「子どもの成人後も、その一人と同居するか」という問に対して、この類型に近い8家族のうち、はっきり「同居する」と答えた者が4例で、他は無答である。ほかの類型の家族のように「別居する」「本人の意志にまかせる」「わからない」と答えた者は一例もない。子どもに対する態度の中には、

伝統的な要望が多い。父親が子どもと遊ぶことは少ない。子どもも、親に反抗しない。親の命令に従順で、家事家業の手伝いをよくする。特に長子の態度がよい。長幼の序列が、この家庭では、まだ生きている。

夫婦の間も、可もなく不可もなくといった形である。「あなたの両親の夫婦関係に比べて、あなたの夫婦の仲はどうか」という問に対して、部落全体としては「もっと仲がよい」の方向に傾いているのに、この家庭では殆んど全部が「同じくらい」と考えている。

この型の家庭は、すべて、近隣に夫の兄弟か妻の兄弟がいる。家に耕耘機がなければ、兄弟の家から、無料で助けに来る。人手の必要な農繁期には、お互いに無料で奉仕する。現金に困る時は、ちょっと借りることもできる。こうして、生産の場でも、消費生活の場でも伝統的な形を変えることが少なく、農業も家事も新しい技術を導入することが遅く、また、農業簿記や家計簿はもちろん、現金出納帳さえつけず、従って投入する労働力の評価などは思いも及ばぬという形である。この形は、一見安定しているように見えるが、少なくとも竹ノ谷部落では、もっとも不安定な家庭になっている。この型の家族に「家庭生活の目標」を問うと、異口同音に「家庭のダンラン」と答える。しかし、この地区の消費生活の水準は、急速に高まっている。いかに、「外に見えない生活」をきりつめても、「外に見える生活」を分相応に守ろうとすれば、金が足りないということにならざるを得ない。実際、この型の家庭を訪問すると、「生活がしにくい」という声を最も多く聞く。そして、一応この型に分類した8例も、実は、純粹の形では、もはやなくなっている。むしろ別の形へ移行する過渡期にあると見るべきである。竹ノ谷部落も、10年前まではこの型の家庭が、90%近くあった。それが、この10年間に、後で挙げるさまざまな形に分化して行った。そして、その移行の一番うしろを歩いているのが、この8例であると考えられる。従ってこの中にも、その進行方向を見ると、いくつかの型があることに気が付く。

その第一は、大家族の場合である。この型の家庭は、人手が多いだけに、労働生産性のほうは余り考慮しないで、とにかく金になる仕事を、たくさん手がけるという生活をしている。米・麦・甘藷はもちろん季節の野菜をそろえ、養蚕・茶・山羊・牛・鶏・うさぎとなんでもやっている。祖父は野菜を池川の土居に売りに行き、祖母は家畜の世話と土方を少々、夫は山林の労務、妻は家事と農業といったぐあいで、収入もよくなるし、支出は伝統型で抑制しているし、他の型ではもう殆んどなくなっているミソ作りもやる。娘も自分のものは自分で縫うといった傾向をもっている。しかし、家業をどの方向にもって行くかについては、はっきりしたものはない。従ってこれが近代的な農業経営に移行するか、あるいは、出稼ぎ型に移動するかは、決められない。この型の家族も、自分たちの労働の生産性が低いことに、次第に気付きは始めている。

「どうも出稼ぎをしたほうがよいように思う」という声をよく聞く。従って後者のほうへ移る可能性が多いように思われる。しかし、それにもかかわらず、この種の家庭は明るくて生気に満ちている。家族のメンバーがそれぞれ、はっきりした役割りをもち、積極的に働く姿勢をもっているので、家族の人間関係はうまくいっているように見える。

その第二は小家族の場合である。これには2つの型が見られる。1月か2月の「短期出稼ぎ型」と、「日雇い型」のように、夫婦がほとんど年中出ているのではなく、暇な時に近所の土木工事などに出る「一部日雇い型」がそれである。



## (2) 出稼ぎ型家庭

世帯主が半年以上出稼ぎに出ている家庭が12世帯あった。その中には、世帯主のみならず後継者の長男も出稼ぎに出ている家が4軒ある。もちろん二種兼業農家で、20～30アールの畑で麦と甘藷を作り、その半数は10アール内外の水田で米を作っている。

この生活様式は最近の5年間に確立されたように見える。家計費は月額5万円前後と推定される。耐久消費財も伝統的農業型の家庭よりも1,2年早く充実する傾向をもっている。テレビの購入も5年前にはじまり3年間に既にその70%が購入を終り、昨年100%になった。電気洗濯機も、ほぼこれと同様である。最近では電気冷蔵庫と扇風機の購入がはじまっている。

食生活もゆとりがあり、新しい料理も月に2,3回は作られる。動物性蛋白質や脂肪分も充分とられている。衣料費の支出もかなり多い。主婦が美容院に行く数も、伝統的農業型では6月に1回というのが普通であるのに、この場合は、その約70%が3月に1回以上行っている。中には1月に2回というものもある。

親子の関係も概してよい。小学生の子どもがある場合、その半分は、参観日に欠かさず出席し、のこりの半分も、一学期に1,2回は出席している。先生との結びつきも、特に親しい者が50%以上ある。父と子の間もいい。子どもと「非常によく遊ぶ」父親が30%、「わりあいよく遊ぶ」のが20%ある。夫婦関係もよい。親の夫婦関係よりも、自分たちの夫婦の仲がよいと答えた者が66%あり、その半分は「遥かに仲がよい」といっている。夫と二人きりで旅行するという者、家族で旅行するという者が、 $\frac{1}{3}$ ある。

出稼ぎ家庭の主婦は、経済的にも時間的にも余裕があり、母と子の間により添う形ができるせいか、親子の仲もよく、明るい感じを受ける場合が多い。しかし、「出稼ぎをしなくても生活ができる社会にしてほしい」と言っている主婦もある。この一見幸福に見える家庭の平和も、盤石の上に立っているものかどうかには、疑問がある。

## (3) 日雇い型家庭

出稼ぎ型と対照的な家庭である。しかし、農業を米と麦と甘藷だけにして、夫は1年365日のうち、360日近くも、山林労務やいろいろの工事に出て行き、妻もまた、一年の大半を道路工事や山仕事に出るという家庭を指している。祖母がおれば子どもの面倒も見られるが、そうでないと鍵っ子になる。

この型の家庭は、比較的最近でき上がったもののように見える。この家庭は、夫婦ともに忙がしくて休む暇がない。「昔はもっと暇があったのに」と伝統的農業型であった時代をなつかしがる言葉の出る家庭である。そしてその多忙さが、加速度的に増大して、今そのピークに達している感じのする家庭が多い。

現金収入も、この2,3年の間に、急カーブを画いてふえている。その結果、耐久消費財の充実も、衣料の購入も、部屋の模様替えも、この1,2年に集中して現われている。テレビもこの2年間に、その70%が購入されている。食生活もかなりゆとりができていいる。しかし、時間のかかる調理は、あまり行なわれない。衣料は伝統的農業型より少しいいようであるが、出稼ぎ型、その他に比べて、かなり少ない。美容院に行く度数は、伝統的農業型と同様、5,6か月に1回という程度である。

小学生の子どもを持っている者で、学校の参観日に出席する率が少ない。最近ではほとんど出席しないという者が半数近くある。担任の先生とも、道であえば挨拶する程度のもの

が多い。

父親で子どもと遊ぶものがほとんどいない。「あまり遊ばない」が70%、「全然遊ばない」が20%、合計90%が否定的な答えをしている。

夫婦関係も、出稼ぎ型とちょうど反対で、両親の夫婦関係よりも自分たちの仲が悪いと答えたものが30%あり、「同じくらい」が40%になっている。伝統的農業型よりも経済的余裕ができたかわりに、夫婦の仲をマイナスにした、という感じがある。「同じくらい。」と答えた者の中にも、かなりの口争いが含まれている。夫は疲れて帰る。妻も同じように疲れているが、いろいろの家事が待っている。時には、夫や子どもに少し手伝ってほしいと思う。その時に、テレビの前に座りこんで動かないと、イライラして、文句をいうこともある。あるいは、夫が自分ですればいいことを妻に命ずることもある。「あたしも同じくらい疲れているのですよ」とドナリたくなる。また、子どもが宿題に手を焼いて聞きに来る。「おとうちゃんに習いなさい」というと、「お前が教えろ。おれは疲れている」という。「それくらいのことを、どうしてできないの」とケンカになることも、しばしばだという。

家庭生活の目標についても、既述の2つの型と全く逆で、「家庭のダンラン」と答えた者は、僅かに1例だけ。「子どもの教育」を挙げた者が25%あるが、これも「高校に進学させたいが、勉強が嫌だから入れるかどうか」という程度のもので、はっきりした目標ではない。「貯金」を挙げた者もあるが、不時の災害や老後のためぐらいのところで、消極的な姿勢である。「農業の構造改善」と答えた者もあるが、これも具体的な計画を持っているわけではない。そして「特にこれといったものはなく、なんとなく毎日が暮れている」と答えた者が25%ある。

これらの態度をまとめてみると、結局、この型の家庭は、「家族が仲よく一日一日を楽しく暮す」という「家庭ダンラン」への希望を失ってしまっている姿だと見るのは、誤りであろうか。だとすれば、これまでの生活を切り換える必要にせまられている家庭ということになる。

この型の家庭では、自分たちの労働や家政を客観的に見るという余裕を失っている。出稼ぎ型の大部分が現金出納帳をつけているのに、この型では、わずかに20%しかつけていない。収入から支出を引いて、残高を貯金するという形になっている。仕事に追いたてられないで、自分のペースで生活するくふうをしなければならない。そのために、多忙の中から余暇をひねり出す方法を、みつけないといけない。特に主婦が家政を計画的にする時間的精神的余裕がほしい。

#### (4) 夫婦同行型家庭

日雇い型が、夫婦ともに類似した仕事をしているのに、働く場所が、多くの場合別々になっているのに比べて、この類型では、全く、四六時中、夫婦が行動を共にしているという形である。伝統的農業型の中にも、ある程度はこの形も含まれているが、現在では、かなり別個に働くことが多くなっているようである。それが夫婦の間の親密さを育てることを困難にしているらしい。

それに反してこの同行型は、夫が大工で妻がその手伝いをするとか、夫婦で一緒に集金事務などを行なうといったようなものである。この例が少くとも2例ある。そしてその2例とも、夫婦仲が最高によい。二人の間の雑談も多い。お互いに相手の手のとどかぬこと

を補おうという態度が強い。食生活は豊かで、新しい料理も多い。子どもとの仲も非常によい。この仲のよさは、出稼ぎ型の夫婦の仲が、夫と妻の役割の分化が明確になり、主婦の仕事が安定して実行されるところに発しているのに比べて、この場合は、その反対に仕事 Task が共同で果たされるところに発している。仲の悪い日雇い夫婦の親密感情を育てるために、この同行型の特徴である「二人きりで労働をする場」を作るくふうも、あっていいと思う。

#### (5) 企業型家庭

完全に農業だけを企業として成功させている家はない。農産加工を加えて考えると一軒ある。林業も杉、桧の植林では、10ヘクタールぐらいの山林では、将来の生活まで保障するかどうかには疑問がある。だからこの型の林業の場合、商店の経営など、農林業以外の経営で補っている例がある。これも企業としては安定している。結局、企業として安定し、家庭生活にゆとりのできているのは、この2世帯かも知れない。

これに続くものとして、山林の労働などの請負業をやり、労働者を何人かかかえている世帯、建築請負業をしている家、杉桧の苗作り、栗、ミカンの栽培、養蜂、養豚などを企業としてやってみようとして試みている世帯もある。この中には、伝統的農業型に近い「労働生産性を無視して、忙がしくあれこれと手を出し、将来への見透しのはっきりしない」ものもある。これを全部含めると12世帯になる。

そのうち5世帯は上記2世帯と山林労働の請負業があり、最も経済的に豊かで、耐久消費財は自動車を含め、ほとんど揃っており、購入の年も古い。次に農業の構造改善がまだその途にあって、収益が充分上っていないために、後継者が出稼ぎに出ている世帯が3世帯ある。家計は、上記よりやや窮屈だが、ゆとりはあるようである。第3の型は、家計費をきりつめて、資本の蓄積に努めているように見える。これが4世帯ある。

しかしいずれも社会的地位が高く、生活も計画的で、農業経営の場合は農業簿記をつけ、家計簿もつけている。農業以外の事業を行なっている場合は、もちろん、それに必要な帳簿を整えている。

夫婦仲もよい。両親のそれよりもよいと答えた者が約70%、親子の間もよい。女の子を農家の嫁にやりたいと言う者が25%ある。女の子を近くに住ませたいと希望する者が半分近くいる。

その反面、家庭の目標として「農業構造改善」をあげている4世帯の中で、子どもに農業に従事させたいと答えた者は1人だけで、あとの3人のうち2人は公務員になることを望み、1人は本人にまかせるとしている。この土地で農林業が、子どもたちの将来の生活を支えることができるかどうか、疑問をもっているらしい。この型の家庭の主婦はPTAに熱心に参加し、先生とも親しく、子どもたちを高校や大学に進学させようとし、そしてまた実際に在学し、卒業もしている。しかしこのうち、農業経営を重点にしている家庭の将来についての予測は困難である。

#### (6) 月給取型家庭

世帯主の収入が100%給与所得である場合、日当のような仕事であっても、その仕事が比較的軽労働であり、妻が家事専業あるいは、仕事をしていても日雇い型のような重労働でない場合をこの類型に含めた。11例あった。

この型の家庭は、夫婦の役割が明瞭に区別され、家庭で役割葛藤の起る危険が少ない。

そのためか、夫婦の仲は非常によい。約90%が、両親の場合よりも仲がよいと答え、そのうち80%が「非常によい」といっている。主婦の生活にも余裕がある。暇がないと答えた者は20%足らず。家庭の目標は「子どもの教育」が40%、「家庭ダンラン」が60%。経済的にも、ゆとりのある家が多い。山村社会で一番明るくて安定しているのは、この種の家庭かも知れない。もっとこの数を増加させたいと思う。

#### (7) 生活保護型家庭

この中には、生活扶助を受けている家庭。子どもからの仕送で細々と暮している老人の一人世帯を含めて考えてみたいと思った。しかし、質問紙の場合も空欄が多いし、学生の聴取り調査もこれを避けたので、残念ながらここで分析することはできない。黒川喜太郎教授は、その家政学原論の中で、「女か男が一人一家に住んでいる場合、家庭と言うことはあるが、これは家庭の擬態であって、なお、完全な家庭たるためには条件の不備がある」<sup>(7)</sup>と述べておられるが、われわれの家政学では、整って安定している家庭以上に、すぐれて「家庭」であると考え。なぜなら、問題があり、家政学的な解決の必要性を多くもっているものこそ、家庭であるという姿勢をとっているからである。

### あ と が き

「まとめ」は省略する。これは「第一報」でもあり、調査結果の一部を述べたにすぎない。しかしここに報告したものは、われわれの今後の家政学育成のために行なう、試行錯誤の第一回の試行という意味をもっているので、あえてこの部分だけを取り出して、報告した次第である。

なおこの調査は、昭和41年度科学研究（総合研究）「四国地域開発の諸問題」（代表者富野敬郎）の一部として行なったものである。

調査に直接当たった者は、本学家政学研究室の深瀬亀美・松浦千代子・児平文雄・村田菊子・笹原邦彦の5名と家政学科2年生21名とであった。

### 引 用 文 献

- (1) 田中久子 欧米における家政学 昭和40年 26 P.
- (2) 日本家政学会第十五回総会シンポジウム 家政学原論について 家庭科教育 38—3 156 P.
- (3) 久保喜男 食事計画論 食生活 60の6—12.
- (4) 経済企画庁 昭和40年度国民生民白書 25 P.
- (5) D. Riesman: The Lonely Crowd 1950.
- (6) 小倉 武 日本の農政 昭和40年 142 P.
- (7) 黒川喜太郎 家政学原論 昭和32年 208 P.

(高知女子大学 家政学研究室)